

# 2017 年度 ウェルフェアオフィサー実施報告書

一般財団法人全日本大学サッカー連盟

全日本大学サッカー連盟(JUFA)では、公益財団法人日本サッカー協会(JFA)が実施推奨する『ウェルフェアオフィサー』に関する取り組みにサッカーファミリーの一員として賛同するとともに、率先した実施を試みている。

一昨年に主催大会である「2016年度 第40回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」にて、ウェルフェアオフィサーを試験的に実施し、その活動内容はJFA リスペクトアウォーズ2017にてウェルフェアオフィサー賞を受賞した。2017年度より本格的にウェルフェアオフィサーに主催2大会にて実施したため、以下の通りに報告する。

参照) JFA HP “ウェルフェアオフィサーの配置～暴力根絶に向けて ～いつも心にリスペクト Vol.10～”  
[http://www.jfa.jp/football\\_family/respectfc\\_japan/heart/news/00009754/](http://www.jfa.jp/football_family/respectfc_japan/heart/news/00009754/)

## ▼ JUFA としてのウェルフェアオフィサー

近年、国際化や様々な価値観、生活様式の多様化が進んだことにおいて、日本の社会のみならず、サッカーを取り巻く環境においても、差別や暴力に対する認識等に対して脆弱な意識、思考、行動が見受けられる。

その中で、ウェルフェアオフィサーを設置することによって、サッカーに関わるすべての人が安全にサッカーを楽しむことができる環境を作り出すこと、また、サッカー活動においてリスペクト精神が浸透し、オンザピッチ、オフザピッチでフェアなプレーを確保することが大切であり、誰もがリスペクトやフェアプレーの考え方を理解することが必要不可欠である。

ウェルフェアオフィサーは、リスペクトやフェアプレーを啓発、促進し、暴力、差別等の予防活動を通じて、問題を未然に防ぐ。また、顕在化した諸問題に対応、問題解決を図ると共に、問題の内容や重大さによって司法機関や諸関連組織への橋渡しとしての役割を担う。

JFAでの取り組みでは指導者が指導者に対してオフィサーとなり、これらの活動を実施している。しかしながら、大学サッカーでは大学サッカーだからこその着眼点をもつ必要があると考える。大学生年代は社会的に「成人」となり、「社会的責任」が発生する年代である。学生ではあるが、1人の責任ある人間として、サッカーに関わらず様々な状況下において判断をそれぞれでしなくてはならない。そこでJUFAでは、大学サッカーの主役である学生をオフィサーとして配置し、学生オフィサーが指導者やプレイヤーに対して、自らが感じた『気づき』を伝えることとした。安心・安全な試合環境をつくるために実際に指導を受ける“受け手=学生”に重点を置き活動し、サッカーを取り巻く環境の“ウェルフェア”醸成に努め、よりサッカーを楽しめる環境になるよう活動していきたい。

## ▼ 実施概要

### 1) 担当オフィサーの選出

全日本大学サッカー連盟兼関東大学サッカー連盟所属の学生幹事8名を今年度のウェルフェアオフィサーとして選出した。関東大学サッカーリーグ戦前期にて研修をし、以下の全国大会にて実施した。担当オフィサーは男性5名、女性3名とし、プレイヤーからマネージャーとしてチームを支えてきた人まで多様な人材を選出した。

### 2) 実施大会

- ① 大会名：2017年度 第41回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント  
対象試合：全23試合中15試合（1回戦8試合/2回戦6試合/決勝戦1試合）
  - ② 大会名：平成29年度 第66回全日本大学サッカー選手権大会  
対象試合：全23試合中6試合（準々決勝3試合/準決勝2試合/決勝戦1試合）
- 大会前、チーム代表者会議にて活動内容を伝達し、チームへの協力を要請した。

### 3) オフィサーの業務内容

- ① 試合前、マッチコーディネーションミーティングにて、両チームおよび審判団に活動意図の伝達
- ② チーム会場入りからウォーミングアップ中もチームの様子を確認する
- ③ 試合中、両チームベンチ横にて指導者の言動、選手の言動、審判員の言動を確認する
- ④ できる範囲にて観客席にいるチーム応援団の言動にも注意を図る
- ⑤ 試合終了後、各チーム代表者に対して試合中に感じた「気づき」を伝える

### 4) オフィサーが実施する上で考慮すべき点

- ・ ネガティブな面だけでなく、ポジティブな面も発見しフィードバックしよう
- ・ ラフプレー後や不可解なジャッジの後のファーストリアクションは抑えきれない部分もある
- ・ 異議・遅延による警告に関するプレーは注視（アクチュアルプレーイングタイムが長くなるよう）

## ▼ 各オフィサーからの報告内容（抜粋）

### 1) 2017年 第41回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント

- ・ 選手が繰り返しラフなプレーをした場合は、スタッフからも一声かけるべきだと感じた。また、交代した選手に対して声もかけず握手もなかったので、「お疲れ様」の一言でもかけてあげべきだと思った。試合終了後、ラフプレーの部分に関しては、十分に気をつけなければならないと伝えたところ、監督も納得した様子であった。交代した選手に関しては普段からその部分はあまり気にしておらず、声をかける時であればなにも言わない時もあるので、そこまで気にすることでもないのではないかと意見もらった。
- ・ 試合が進み得点が決まるにつれて、相手チームのラフなプレーに対してリアクションが大きくなっているように感じた。いつまでも倒れこんでいて遅延行為と思われるような態度が何度か見られた。試合終了後、監督に伝えたところ、リアクションに関しては、ラフを見逃すと怪我をしてしまうという話があった。また、遅延と思われる行為に対しては良い行為ではなかった、選手に指導していきいたいという言葉もいただいた。
- ・ 後半42分、相手のワンタッチでA大学のスローインかと思われたシーンで相手ボールというジャッジが下された。そのジャッジに対し11番MFと2番DFが主審に激しく詰め寄り抗議した。その行為に対し、不要なカードをもらわないようベンチの監督やコーチ、ピッチ内の選手などチーム全体が「落ち着け」「やめとけ」と声をかけ、何とか主審から離れた選手たちだったが、戻る際に一方の選手があからさまにイラついた態度で舌打ちをした場面があった。試合終了間際の緊迫した時間帯であるということを加味しても、納得のいかないジャッジに対して舌打ちをするという行為はリスペクトの感じられない反省すべき行為である。試合後、監督と伝えた際にその話に付随して、審判のジャッジとチームの方針の関係の難しさについて少しお話しいただいた。うちの大学は基本的には笛が鳴るまでプレーを続ける、簡単に倒れない、ボールを取られないようにと選手に指導しているようだ。だがそうなるとファウルがあった際も、倒れなかった、ボールを取られなかった選手に対して審判はジャッジの判断がしにくい。逆にうまく倒れてファウルを貰うという方針を取っているチームや選手もいるだろう。プレーを続けようと頑張っている選手の方が報われないというのはおかしい話なんじゃないかという意見をいただき、改めて審判のゲームコントロールの重要性、難しさも感じた。
- ・ 後半40分頃、終了時間が差し迫ってくる中でコーチが審判に対して不満を見せるのが目立った。特に、時計を止める主審に対して「ジェスチャーだけで本当に止めているのか。アディショナルタイムに反映されるのか」と第4審に問いかけていたのは残念であった。監督も試合展開的に熱くなってしまうのは仕方ないとしつつも、アディショナルタイムの件については熱くなりすぎていたと反省を示していた。
- ・ 前半10分、4番DFが味方の選手に対し「潰せ、潰せ」という発言が聞かれた。その後、それに応じるように味方選手が激しく相手に当たるシーンが多くみられ、それに対しその他選手も「グッド!」と声をかけていたが、捉え方によってはこの一連の発言は危険なプレーを助長する発言ともとることができる。そういった細かいシーンはベンチも気づきにくい場面でもあるので、監督にフィードバックした際は「それは気が付かなかった、気を付ける」というように素直に受け止め、改善の姿勢を見せてくれた。
- ・ 前半4分、オフサイドがあったかと思われたシーンで、副審が旗を上げたが主審がそれを認めなかったジャッジに対してベンチからの抗議があった。ファーストリアクションだけではなく、そのプレーが終わった後にも監督から「なあ、絶対オフサイドやっただろ」と審判に呼びかける形での抗議、トレーナーからの「審判ちゃんと見てんの?」といったような審判のジャッジをリスペクトする姿勢が見られない発言があり、選手たちは切り替えて素早くプレーをしていたにも関わらず、指導する立場にあるベンチ陣がそういった対応を見せることで選手や試合の雰囲気にも良くない影響が及ぶ可能性があり、反省すべき点である。試合を通して若干不信感のある副審のジャッジや、試合の流れからつい熱くなってしまうのも多少は仕方がないことだと我々も感じると伝えたいのでそのシーンについて話をすると、審判への態度が良くないことについては監督含めベンチのスタッフ陣も理解しており、次から気を付けるという言葉もいただいた。
- ・ 選手主体でチームを統制しており、審判の判定に対して不服そうにする選手が出ると、必ず静止する声がかかっていた。
- ・ アップ時から試合終了までベンチメンバー含めポジティブな声が多く出ていたことからチームの一丸性がうかがえた。
- ・ 各チームそのチームのカラーなどはあると思うが、監督が選手に厳しく命令口調で指示を飛ばすのではなく、「～しよう」「～してみよう」と選手のプレーを尊重したうえで発言したともとれる指示の仕方をしており、選手がのびのびプレーできるのではないかと好感が持てた。監督にフィードバックした際も学生である我々に対して、謙虚にウェルフェアオフィサーの一意見として真剣に話を聞いてくださった。そういったところがチームの献身的なプレーや試合中の良い雰囲気につながるのではないかと感じた。

### 2) 平成29年度 第66回全日本大学サッカー選手権大会

- ・ 監督が選手に指示を出していた際、「1タッチでやれよ、おい」と声かけをしており高圧的且つ、選手の自主性の尊重に欠けるのではないかと感じた。
- ・ 白熱する自チーム応援団の応援に対して「うるせえ!試合に集中させろ」というような発言が見られた。確かに、拡声器を使った大音量の応援によってベンチからの指示がかき消されており、なかなかピ

タッチ内の選手に伝わらないという場面も見られたため、難しいところではあると感じる。両校の応援合戦に観客は楽しんでたかもしれないが、ベンチと選手たちとの若干の真剣さや温度差を感じた。A大学の監督も応援団のふざけすぎた応援に対して「こっちは真剣なんだよ！黙ってる」と怒りの色を見せていた。また、試合を通してヤジも多いように感じた。特に、試合終了間際のB大学PKの際、キッカーである10番FWに向けて「これ外したらブロいけないぞ、恥ずかしいぞ」などという相手選手を煽るような発言も見られ、迫力のあるいい試合だっただけに、そういったヤジは非常に残念であった。

- 選手同士がハイボールで競り合った際にお互い頭をぶつけ、痛めた様子だったが、互いに手を取り合いコミュニケーションするシーンがあった。今回の試合はこのシーンのように終始両チーム選手同士、審判ともよくコミュニケーションを取り、良好な関係で試合を展開していたように思う。
- 試合後、A大学の監督にベンチからの審判のジャッジに対しての不要な抗議や文句に関して伝えたところ「それの何が悪いの？ダメなの？」と言っていた。敗戦後という状況ではあったが、審判のジャッジに不服を言っても判決が覆ることはなく、逆にその熱がフィールドの選手に伝わってしまうこともあるのでもう少し考えてほしいと思った。またこちらのフィードバックについても協力していただかず、終始イライラした態度をとられてしまった。
- 監督に今回の試合で感じた部分をフィードバックした際には、フェアプレーの基準についてのお話も頂いた。「どこまでが『フェアなプレー』で、どこまでが『戦術』なのか。リードを守るための明らかな時間稼ぎは、フェアなプレーでは無いと批判することも、立派な戦術と捉えることも出来る。そこはとても難しい部分である。」という監督のお話を聞き、ウェルフェアが下す「フェアプレー」の基準ももう一度考える必要があるように感じた。

### 3) 担当オフィサーの本活動を受けての感想（抜粋）

- 今回、ベンチ横で試合を観察し、ベンチメンバーの言動、行動を観察する中で、改めてそれはフィールド内選手に影響すると感じました。例えば、ベンチのコーチから「相手を潰せ！」と言われれば、選手はおもいきり相手選手へタックルに行く。応援席からは「いいぞー！」「もっとやれ！」と檄が飛ぶ。このような連鎖の中から、怪我に繋がるプレーが生まれやすいと感じた。選手も自分の感情はコントロールしなければなりません。しかし、周りから煽られれば、危険なプレーでも気持ち良く感じます。お客さんからしても、バチバチ身体を当て、激しいプレーが出れば盛り上がるし、面白いでしょう。しかし、それで選手の怪我に繋がってしまったら本末転倒です。その部分だけ見れば、怪我をさせた該当選手だけが悪いように見えます。しかし、今回感じたのは、その選手だけではなく、「潰せー！」と選手に声をかけたコーチ。危険なプレーに「いいぞー！」「もっとやれー！」と声をかけた応援団。周囲からの熱のこもった声に選手の熱もあがり、このようなプレーに繋がる可能性が高くなると思います。もちろんこれに関しては、選手のモチベーションをあげるためにといったプラスの面もあります。しかし、危険なプレーには拍手ではなく、注意の声が必要なのかもしれません。面白い試合は、激しい試合だけではなく、怪我也フェールも少ないクリーンな試合のほうが見ている人も気持ち良く、次への楽しみが増えると私は思います。
- 今回の大会を通して、一番感じたのはやはり選手もだが特に監督等スタッフの審判へのリスペクトの薄さである。審判は試合をジャッジ一つで左右する非常に重要な立場ではあるが、選手が勝つために努力するように、審判も公正・公平に選手がサッカーをできるように努力しており、その中で良いジャッジやミスジャッジなどのブレがあるのは多少しょうがない部分なのでは、と私は考える。監督等スタッフの方々は審判の級を持っている方も多いとは思いますが、だからこそそういった部分をどう受け取るか、リスペクトをもっともう一度考え直すべきであると思う。
- ウェルフェアオフィサーの存在については非常に有効であると思う。抑止的な側面もさることながら、試合中熱くなり、感情的になってしまったためにした行為を試合後第三者と話すことによって、冷静に自チームの行為を降り返ることができる点において貴重な役割を果たしている。育成年代では指導者がそういった視点で選手たちに指導していることも多いが、トップカテゴリーでは勝利至上主義が先行され、第三者の立場から意見する機会は少ないので、トップカテゴリーにこそ積極的に導入して頂くべきではないかと感じた。
- 大学サッカーに限ったことではないが、選手だけでなくサポーターや応援、ベンチが作る雰囲気は想像以上に大きく試合をするのだと改めて感じた。明らかに自分が相手選手に危険なプレーを犯しファウルを貰った際も瞬間的に謝罪ではなく不服があるような反応をするのは、リスペクト云々もそうだが、試合のヒートアップした雰囲気が僅かながら影響しているのではないだろうか。試合後に両チーム監督に私たちオフィサーが気づきを伝える際も、審判への過剰な抗議や暴言がリスペクトに欠けた良くない行為であるということに対しては「分かってはいる」が試合の雰囲気や自身が熱くなってしまうといった言動をしてしまうという監督がほとんどであった。だが、逆に言えば今回のようなウェルフェアオフィサーの活動が浸透し第三者が気づきを伝える機会が増えていけば、監督自身の「(良くない行為であることは)分かってはいる」というリスペクトの意識の部分が強めることができ、それが自身の暴力・暴言が言動に移る前の歯止めになる、ということが期待できる。さらに、指導者のそういった意識の根底の部分から変えていければ、監督などチームのベンチが選手を上手にコントロールすることができ、最終的には選手がヒートアップして起こしてしまう挑発的なプレーや怪我に繋がる危険なプレーの減少、つまりは暴力・暴言の根絶、安心・安全な試合環境づくりにつながるのではないかと感じた。今はあまり日本のサッカー界には浸透

していないようだが、今回の活動をきっかけに大学サッカーだけではなくさらに多くのマッチ・ウェルフェアオフィサーの活動の場を設ければ、よりフェアでタフな白熱した面白いサッカーが増えるのではないだろうか。

- ・ ウェルフェアオフィサーとしての指摘の難しさを感じた。1つの遅延行為、1つのファール、1つの異議などは「これも含めてサッカー」で片づけられてしまう。これは、ウェルフェアオフィサーとして試合を見ていく中で、疑問に思ったことである。もちろん悪質なファールや監督の執拗な抗議などはウェルフェアオフィサーとして見逃せないポイントであるが、それ以外の些細なファールや遅延行為は声を大にしては言えないが、試合状況によっては「ナイスプレー」として評価される。しかし、ウェルフェアオフィサーとしての存在意義はそうしたフェアプレーではないプレーにはどんな些細なことでも指摘しなければならない。そうした積み重ねが大学サッカー、日本サッカー界にリスペクト、フェアプレーの精神をもたらすのではないかと思った。

## ▼ 警告（異議・遅延）および退場（退席も含む）数の比較

このウェルフェアオフィサーの活動が一概に警告（主に異議・遅延）や退場数等に影響するとは言い難いが、一種のフェアプレーの指標として以下の表を示す。実数を見て分かる通り、この活動による大きな変動はないのが事実である。しかしながら、この活動を長期的に継続していく中で実際に試合への影響を与えることができるのかどうかという意味で、このような検証は継続していきたい。また、各種トップカテゴリー大会の実数も記載している。

表) 総理大臣杯および全日本選手権（2016年, 2017年）各種比較

大会名	試合数	ゴール	警告	退場	異議遅延	警告なし試合数	1試合あたり平均				
							ゴール	警告	退場	異議遅延	警告なし
2017年PMC	23	72	53	3	6	3	3.13	2.30	0.13	0.26	0.13
2016年PMC	31	86	58	2	4	6	2.77	1.87	0.06	0.12	0.19
2017年インカレ	23	73	53	2	7	3	3.17	2.30	0.08	0.30	0.13
2016年インカレ	23	88	49	1	5	0	3.82	2.13	0.04	0.26	0

注) PMC：総理大臣杯/インカレ：全日本大学選手権

参考) 各種大会の記録

▷ 天皇杯（2017年）87試合

1試合平均ゴール数 3,35 警告数 2,24 退場 0,07 異議遅延 0,29 警告なし 0,09

▷ 全国地域チャンピオンズリーグ（2017年）24試合

1試合平均ゴール数 3,13 警告数 2,45 退場 0,08 異議遅延 0,08 警告なし 0,04

▷ CWC UAE 大会（2017年）8試合

1試合平均ゴール数 2,20 警告数 3,60 退場 0,20 警告なし 0試合

▷ WC ブラジル大会（2014年）64試合

1試合平均ゴール数 2,70 警告数 2,80 退場 0,20 警告なし 0試合

## HIKARI プロジェクト

学生が誰かの“HIKARI(光)”のような存在になれることを目指し、成長できる機会の提供を目的とした社会貢献活動を中心とする活動を『HIKARI プロジェクト』と題し実施している。ウェルフェアオフィサーもこのプロジェクトの一貫として活動を実施しており、その他にも日本知的障がいサッカー連盟とのパートナーシップ協定締結による様々な活動協力、学生への講演会の実施等、多岐に渡った活動を展開している。

▷ Team UNICEF × JUFA — ONE GOAL ONE COIN —

本プロジェクトのひとつである“Team UNICEF × JUFA — ONE GOAL ONE COIN —”をここでは紹介する。

これは、JUFAが主催する全国大会にてONE GOALにつきONE COINを本連盟より寄付する活動である。JUFAでは技術の向上はもちろんのこと、フェアプレーの精神を大切に、学生たちのフェアプレーが世界の子どもたちへの支援になることで、サッカーに関わるすべての関係者の意識の向上を目指す。学生が直接的に金銭的な社会貢献活動をするのは困難であるが、本企画を通して、大会における選手の活躍（勝利に向けた熱くフェアなプレー）によって間接的に社会貢献に携わってもらい、将来的に社会のために、誰かのために活躍できる人材を育成していく。

詳細は、全日本大学サッカー連盟 HP (jufa.jp) にて

- 『Team UNICEF×JUFA —ONE GOAL ONE COIN—』について <https://www.jufa.jp/news/news.php?kn=615>

- 2016年度実施報告 <https://www.jufa.jp/news/news.php?kn=640>

- 2017年度実施報告 <https://www.jufa.jp/news/news.php?kn=799>

- 『リスペクトアウォーズ2017 “ウェルフェアオフィサー賞”』受賞 <https://www.jufa.jp/news/news.php?kn=703>

